

編 集 後 記

倉皇の間であって出発した本誌も、ここに3号を迎えることができた。編輯者の間では既に本年中に発行される本誌の大凡その企画は出揃っているので、これから相次いで斬新な内容が発表されることであろう。どうか期待していただきたい。

本誌では、三回に亘って連載された白壁氏の早期胃癌のレントゲン診断が完結する。美しい写真と、膨大な文献一覧は、大いに読者の参考になることであろう。ファイバースコープによる直視下生検は、この道の開拓者としての常岡氏の面目躍如たるものが感ぜられる。

本号の症例は又々珍しく、この道に進むものにとって見逃すことのでない、又大いに参考になるものばかりである。こんな症例ばかりよくぞ毎月集まるものだと思う。

肩のこらないようにと心掛けた胃カメラとレントゲンの技術解説は、あと一回連載される予定である。

座談会、上部胃癌は、今春の学会に於けるシムポジウム演者を中心に行なったものである。学会では聞くことの出来ぬニュアンスをお汲みとりいただきたい。放射線学会の胃の診断部門を司会された青山氏による学会印象記は独特の味がある。

本誌の視覚に訴えるという趣旨がようやく軌道に乗って来たようである。視覚に訴える「質疑」、いうなれば「写真入りの質疑応答」も可能と思われるようになって来たといえるでしょう。どしどし御寄せ下さい。

<市川平三郎>

<編集> 早期胃癌研究会